

# 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第19回 全国大会プログラム

日 時： 2019年11月23日（土） 9:45～17:50  
場 所：近畿大学東大阪キャンパス A館  
〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3丁目4-1

★受付 9時30分より、A館3階301教室前

★研究発表 (9:45～12:10)

	第一室 (A館1階101)	第二室 (A館1階102)
9:45 10:30	～ 司会：神戸市立外国語大学 新野 緑 1. 家庭主義とサッカーの風刺的視線 —『英国のスノッブたち』を中心に 東京大学 (院) 岡本 佳奈	司会：東京外国語大学 (兼) 加藤 千晶 1. Swinburnian Woman in Sin: Phædra 慶應義塾大学 (院) Ayvazyan Lilith
10:35 11:20	～ 司会：西南学院大学 金子 幸男 2. 19世紀ロンドンにおける娯楽の社会的 位置付けについて—手遣い人形劇『パンチ & ジュディ』を例に 神戸大学 研究員 平野 惟	司会：筑波大学 山口 恵里子 2. ウォーターハウスの2つの《レイミア》 —主題解釈の変化をめぐって 関西大学 (院) 伊藤 ちひろ
11:25 12:10	～ 3. トマス・ハーディの『日陰者ジュード』 における移住と帰国の意味—アラベラを 中心にして 関西外国語大学 橋本 史帆	3. Millais as a Sartorialist: Costuming the Literary Subjects by John Everett Millais 聖心女子大学 (兼) 浅野 菜緒子

★シンポジウム (A館3階301教室、13:30～16:00)

ヴィクトリア朝と音楽—せめぎ合う境界

司会：立命館大学	金山 亮太
報告：近畿大学	吉田 朱美
報告：お茶の水女子大学	西阪 多恵子
報告・演奏：声楽家	山崎 太郎
[ピアノ]	中谷 有香]

★特別講演 (A館3階301教室、16:15～17:30)

ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダー—周縁化された女性たちの戦略

司会：同志社大学	玉井 史絵
西九州大学	香川 せつ子

★総会 (A館3階301教室、17:35～17:50)

司会：日本女子大学 佐藤 和哉

★懇親会 (18:00～20:00)

会場：Cafeteria November  
(11月ホール地下)

## 【研究発表】

(第一室)

### 1. 「家庭主義とサッカーの風刺的視線－『英国のスノッブたち』を中心に」

東京大学(院) 岡本佳奈

アマンパル・ガルチャは、スケッチ文学が変動するヴィクトリア朝において停止した時間を生み、読者の求める安定感を創り出したと『スケッチから小説へ』(2009)で論じた。しかし、サッカーのスケッチ作品の本質は、停止した時間だけではなく、ホガースの連作絵画のように世界の継起的表象を視覚的に表現し、風刺することにある。本発表は、その事例として『英国のスノッブたち』(1846-47)をとりあげ、ヴィクトリア朝の家庭主義に対する風刺的視線と表象としての意義を文化論として吟味する。家庭における不幸な犠牲者たちを救おうとする語り手は道化じみており、真摯な主張をするほど滑稽味が増すというジレンマを抱えている。風刺家をも笑いの対象へと昇華させるこのジレンマこそサッカーの風刺の特徴の一つである。家庭主義に翻弄される道化的な役割は『虚栄の市』(1848)において最も愚直な人物ドビンに引き継がれるが、その関係性についても最後に考察する。

### 2. 19世紀ロンドンにおける娯楽の社会的位置付けについて

―手遣い人形劇『パンチ&ジュディ』を例に

神戸大学研究員 平野 惟

手遣い人形劇「パンチ&ジュディ (Punch & Judy)」の発展とこれを専門に演じる「パンチ・マン (Punchman)」という職業の形成を例にとり、生活・労働形態の変化がいよいよ加速する18世紀後半から19世紀初頭ごろのロンドンにおいて、娯楽の社会的位置付けがどのように変化したのかを考察する。パンチ劇はそもそもフェアの場における小屋掛けのマリオネット劇であったのが、群衆の騒擾に対する懸念から規制を受けるようになって広場を飛び出し、都市の路上という近代の所産と影響し合うことで完成された経緯がある。発表ではヴィクトリア朝初期から中期においてパンチ&ジュディの上演が「都市における(文字通りの)移動祝祭」「人々の仕事を中断させるもの」として眺められていたことを紹介しつつ、大都市を行き交う人の流れを読み、下層大衆から王族に至るまでを相手としながらパフォーマンスを行うその演じ手が、当時の首都全体で行われつつあったビジネスの再編成と、それに対置されつつあった「余暇行動」としての娯楽の捉え直しの中でどのように振舞っていたかを考えたい。

### 3. トマス・ハーディの『日陰者ジュード』における移住と帰国の意味－アラベラを中心にして

関西外国語大学 橋本史帆

19世紀のイギリスでは、多くの人々が植民地などに出国する一方で、外地に出掛けた人々の約40%がイギリスに帰国したと言われている。そして、そのような帰国者に対する当時の人々の印象は悪く、これはトマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840-1928)の小説『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1895)に登場する移住先のオーストラリアから戻ってきたアラベラにも読み取ることができる。本発表では、アラベラがイギリスとオーストラリアで経験した家庭的不幸に注目する。そして、ヴィクトリア朝時代の移住と移住先からの帰国の状況と絡めてアラベラのイギリス出国の意味と、オーストラリアから戻ってきた彼女が背負っている負のイメージについて考察していく。アラベラの移住と帰国に、当時のジェンダー観や階級に対する反発、そしてイギリスの文化をオーストラリアに根付かせようとした移住政策の失敗などが暗示されていることを明らかにし、彼女が帝国主義に動揺を与える人物であることを詳らかにしていく。

(第二室)

### 1. Swinburnian Woman in Sin: Phædra

慶應義塾大学(院) Ayvazyan Lilith

After nearly two centuries of neglect, the tragedy of Phædra re-emerged in 1866 as a relatively short poem in the *Poems and Ballads* of Algernon Charles Swinburne (1837-1909). Despite the reputation and fame of the classical myth, however, and unlike versions by his predecessors (Euripides, Seneca, Ovid and Racine), Swinburne's "Phædra" has not undergone a meticulous analysis. Though specialists of Euripides and Seneca occasionally comment on the poem, their observations unfortunately and predictably suffer from limitations. Disregarding the fact that Swinburne's Phædra is deeply, madly in love with her stepson, they view Swinburne's heroine solely as aggressive and masochistic. She is, however, a strong and independent woman willing to give up her life rather than continue an existence in the unbearable reality of an unrequited love and a family curse.

The aim of this paper is to derive insights about the character of Phædra by comparing Swinburne's delineation

of her—including his adaptation of her for a Victorian audience—with the portrayals of her in the classical and subsequent versions. Furthermore, by drawing parallels between Swinburne’s “Phædra” and Marina Tsvetaeva’s *Fedra* (1927), the first remaking of the myth by a female author, the paper points out the existence of the feminism and interpretations of the female character in the poem that stimulate 20th-century sensibilities.

## 2. ウォーターハウスの2つの《レイミア》—主題解釈の変化をめぐって

関西大学(院) 伊藤 ちひろ

J・W・ウォーターハウスは1905年と1909年に、《レイミア》と題した油彩画をロイヤル・アカデミーに出品した。この2点の絵画の着想源は、ギリシア神話の怪物ラミアの物語と、それに基づいてJ・キーツが1820年に発表した詩『レイミア』である。とはいえ1905年の作品では舞台が古代から中世に移されている。さらに、1905年にはレイミアの足元に死を象徴する芥子の花が描かれていたが、それが1909年には「報われない愛」を花言葉にもつ菖蒲に変わり、リシウスもいなくなっている。このように画家は、人を食らう怪物の主題と、それを悲恋のヒロインへと展開させたキーツの主題にさらなる解釈変更を加えた。これは画家自身の発想と絵画表現の独自性を主張するためではないか。本発表では、この仮説をそれぞれの習作や、同時代の画家H・ドレイパーによる、比較的神話に忠実とされる《ラミア》(1909年)などとの比較を通して検証する。

## 3. Millais as a Sartorialist: Costuming the Literary Subjects by John Everett Millais

聖心女子大学(兼) 浅野菜緒子

This paper will trace how John Everett Millais investigated costuming in history paintings and developed sartorial illustrations. Sartorial elements are essential in the works of Pre-Raphaelite artists and those who were closely associated with them. Preceding studies and exhibitions, such as Roger Smith’s study on Bonnard’s influence and the Tate retrospective exhibitions in 1984 and 2012, have paid attention to the fashions that were depicted, often designed by certain artists such as Dante Gabriel Rossetti and Edward Burne-Jones. Compared to his fellow Pre-Raphaelites’ interest in costume descriptions, however, Millais’s sartorial interest has not been examined much previously. Focusing on several works by Millais including *Isabella* (1848-49), *The Woodman’s Daughter* (1850-51), *Ophelia* (1851-52), and *Autumn Leaves* (1855-56), this paper will explore the elaborate descriptions of costumes based on his meticulous research of different garments and fabrics for his literary subjects in the works of the Pre-Raphaelite and post-Pre-Raphaelite periods. Through detailed examination, this study will attempt to uncover the artist’s unexplored aspect as a sartorial draughtsman and to reveal that his sartorial interest contributed to his overall artistry.

### 【シンポジウム】

#### ヴィクトリア朝と音楽—せめぎ合う境界

	司会	立命館大学	金山 亮太
Musical Association (1874～)創設期の担い手たち			
—音楽家と科学者	報告	お茶の水女子大学	西 阪 多恵子
“George”をめぐる音楽	報告	近畿大学	吉 田 朱 美
Vaughan Williams, <i>Songs of Travel</i> (1901-04) をめぐる旅	報告・演奏	声楽家 [ピアノ]	山 崎 太 郎 中 谷 友 香

数々の「大作曲家」が活躍した輝かしい時代である19世紀、大陸のような「大作曲家」を輩出しなかったイギリスは、西洋音楽史の中ではどちらかと言えば影が薄い存在である。しかし、そんなイギリスも、19世紀半ば以降は音楽人口の裾野が広がり、豊かな音楽文化を育てていった。本シンポジウムでは、ヴィクトリア朝イギリスの音楽文化の一端を、「境界」をキーワードとして見ていきたい。音楽はプロとアマ、公と私、聖と俗、男性と女性、大陸とイギリスといった境界がせめぎ合う場であり、異なる領域

が互いに交じり合うことにより、新たな音楽文化が生まれていった。

たとえば、音楽文化はプロの作曲や演奏だけではなく、さまざまな人々が関わる音楽の営みによってつくられる。アマチュアはその中枢を担ったといっても過言ではない。社会的地位や名誉を追求する必要がなく、多少とも経済的余裕のあるアマチュアたちは、幅広い教養やヴォランティア精神を発揮してプロの音楽家たちに影響を与え、彼らと連携した。また、聖と俗とのせめぎ合いは、女性オペラ歌手の小説などにおける表象に現れている。従来、女性オペラ歌手は娼婦と同一視され、性的にふしだらなイメージを賦与されがちであったが、George Sand の影響により、音楽的感性と繊細な感受性、美德とを併せ持つ“superdiva”と呼ばれる「聖なる」歌姫像が英語圏でも生み出されていった。

このように独自の発展を遂げたイギリスの音楽文化の軌跡を、演奏を交えながらたどりつつ、19 世紀後半から世紀の転換点に至る社会と文化のダイナミズムを明らかにしていきたい。

**【特別講演】**

司会：同志社大学

玉井史絵

**ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダー—周縁化された女性たちの戦略**

西九州大学

香川せつ子

1896 年アテネで始まったオリンピックは、2020 年東京で第 35 回大会を迎える。サッカー、ラグビー等花形競技の大半が、イギリスで近代スポーツとして成立した。ヴィクトリア時代のジェントルマンのレジャー活動やパブリックスクール等のアスレティシズムには、豊かな研究蓄積がある。スポーツの国境を超える伝播は帝国の拡大と連動したが、この潮流に与ったのは男性エリートだった。1948 年のロンドンオリンピックに至っても、女性は全競技者数の 10%に満たない。

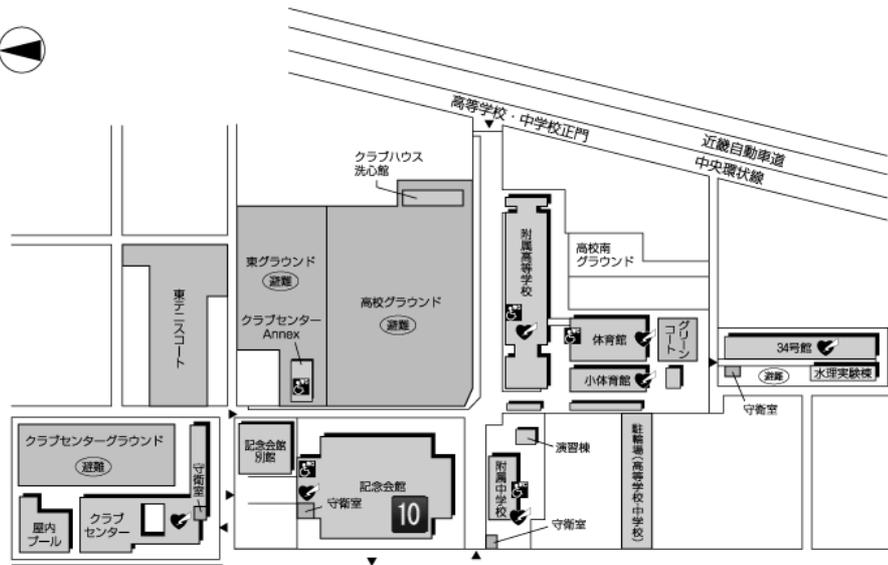
他方で「男性の聖域」から排除された女性たちも、19 世紀後半には学校という場で身体運動に接し、「女性向け」の様々なスポーツを謳歌した。ヴィクトリア時代の社会と同様に、スポーツにおけるジェンダー境界線も変化した。ここではスウェーデン出身の体育教師 Martina Bergman-Osterberg (1849-1915) に注目し、スウェーデン体操の普及、女性体育教員の養成、国際女性会議への発信等の実践を手掛かりに、境界線変化のダイナミクスを探りたい。

\*会員以外の方の参加も歓迎いたします（無料、ただし、懇親会に参加される方は懇親会費、一般 5,000 円、学生 2,000 円をお支払い願います）。

★ 休憩室：A 館 3 階 306

★ 書店展示：A 館 3 階 306

会場マップ 近畿大学東大阪キャンパス



■近畿大学校舎配置図■  
(令和元年6月現在)

- ☑ = AED(自動体外式除細動器)設置場所
- ♿ = 車椅子で利用できるトイレの設置場所
- 避難 = 災害時一時避難場所



AEDとは

AEDとは、自動体外式除細動器のこと。  
心臓が小刻みに震えて全身に血液を送り出すことができなくなる心室細動(致死的不整脈)を生じた場合に、心臓に電流を流すことにより正常に戻す(除細動)ための医療機器。  
電極/パッドを患者者に付け、音声メッセージに従って操作する事で「除細動」が可能です。

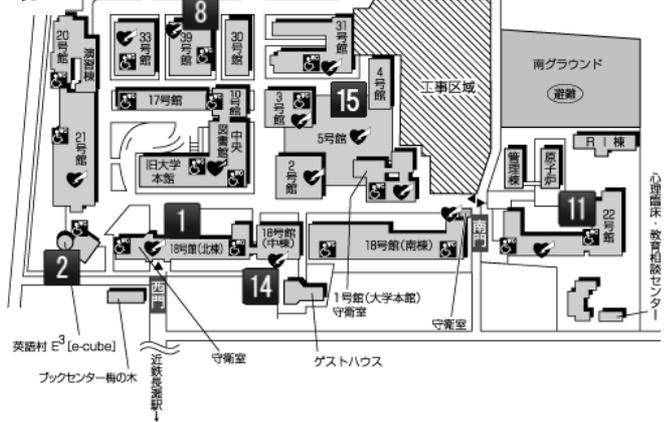
AED(自動体外式除細動器)設置場所

1号館(1階)	34号館(1階)	G館(1階)
2号館(1階)	38号館(1階)	KUDOS(1階)
3号館(1階)	39号館(1階)	記念会館(1階)
5号館(2階)	11月ホール1階	クラブセンター(1階)
旧大学本館(1階、3階)	3館、メディカルサポートセンター	南門守衛室
18号館(1階)	(KINDAIクリニック)	東門守衛室
21号館(2階)	立体駐車場守衛室	西門守衛室
22号館(1階)	A館(1階)	Eキャンパス守衛室
31号館(3階)	B館(1階)	バイク駐輪場守衛室
33号館(1階)	C館(1階)	Eキャンパスグラウンド

車椅子用トイレ設置場所

1号館(1階)	20号館(1階、4階)	B館(1階)
3号館(1階、2階)	21号館(1階)	C館(1階)
旧大学本館(地階、1階)	22号館(1階)	D館(1階)
図書館(3階)	31号館(1階)	G館(1階)
10号館(1階)	33号館(1階)	英語村(1階)
17号館(1階)	38号館(1階、6階)	KUDOS(1階)
18号館(北棟)(1階)	39号館(1階、6階)	BLOSSOM CAFE(2階、3階)
18号館(南棟)(1階)	11月ホール(1階、3階)	記念会館(1階)
19号館(1階)	A館(1階)	

懇親会場



## 会場アクセスマップ

新大阪から

新大阪（大阪メトロ御堂筋線）⇨ 難波（近鉄奈良線）⇨ 八戸ノ里 ⇨ バスまたは徒歩で近大

または

新大阪（JR）⇨ 大阪（JR 環状線）⇨ 鶴橋（近鉄奈良線）⇨ 八戸ノ里 ⇨ バスまたは徒歩で近大

または

最寄駅から 近鉄大阪線「長瀬」駅 ⇨ 徒歩で近大

- 近鉄奈良線「八戸ノ里」駅  
徒歩:約 20 分 バス:約 6 分

【近鉄バス(76番系統)】 金物団地  
前行 :約6分

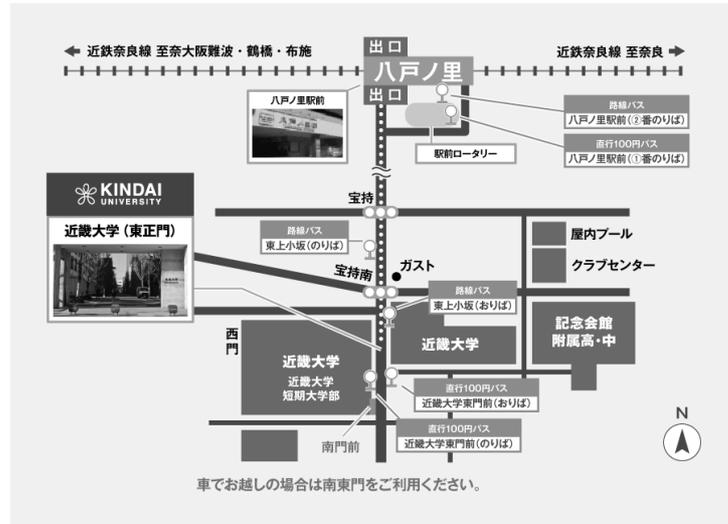
八戸ノ里駅前発  
休日ダイヤ

8時17分, 53分

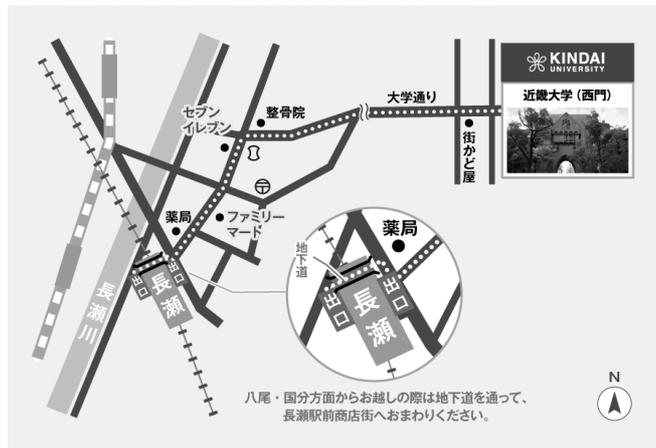
9時30分

10時10分, 50分

12時10分, 50分



- 近鉄大阪線「長瀬」駅 徒歩:約 20 分



日本ヴィクトリア朝文化研究学会  
(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局: 東京都文京区目白台 2-8-1

日本女子大学文学部英文学科

佐藤和哉研究室内

Tel: 03-5981-3560/Fax: 03-5981-3549

E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com